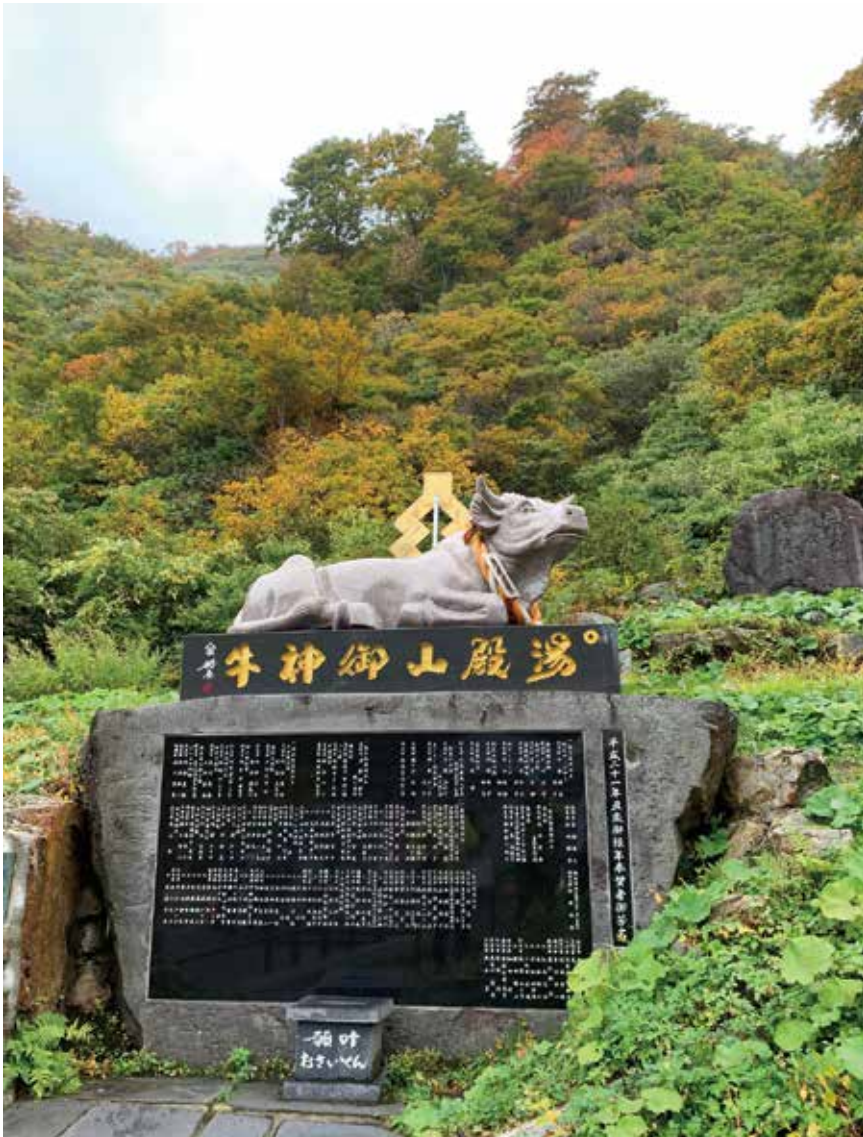


巡礼の山々

出羽三山 過去・現在・未来を 歩く修験道



出羽三山 丑歳御縁年(※1)

自然と信仰の再生の山旅

日本百名山の月山は、羽黒山、湯殿山と合わせて出羽三山と呼ばれている。月山が過去、羽黒山は現在、湯殿山は未来を表わす。修験道の順路としては羽黒山を出発して、月山で死と甦りよみがえりの修行をしたのちに湯殿山で再生するというのが一連の修行である。

今年10月12日に、まず羽黒山を巡ってきた。随神門前に藤沢修平の案内看板「羽黒の呪術者たち」がある(※2)。そこには「たとえば私はいまでも、羽黒山伏が吹き鳴らすほら貝の旋律を記憶している。口に出せばブーオーと正確に出てくる。神秘的



羽黒山 稜川 水垢離



藤沢周平ゆかりの案内板

で、少し物悲し気で、また威圧的でもある旋律である。私が子供の頃、彼らはそのほら貝を吹き、兎布、結袈裟の山伏装束をつけ、金剛杖をつき、高足駄を履いて、村にやってきた。そして家々に羽黒山のお札を配って回った」と刻まれている。

参道入り口の朱色の随神門をくぐると稜川にでる。昔はここで水垢離を行なった場所である。さらに進むと樹齢千年以上の「翁



現在への入り口羽黒山随神門



羽黒山五重塔

杉」が現れる。樹齢の長い木や、変わった奇木には山の神が宿るとされている。山の神は女神である、マタギなどの間では、祈願の際に石や木でつくった男のシンボルを供えれば願いが叶うと伝えられている。立派な杉並木を左に曲がると「羽黒山五十の塔」だ。立派な塔はこの土地での信仰の篤さをひしひしと感じさせてくれる。この先は2446段の石段を登りきると、「三神合祭殿」が現われる。

ここにお参りするだけで羽黒山、月山、湯殿山の神仏が拜める。現世をあらわす羽黒山の神様は「伊氏波神」産土神」で、人が生まれた土地を守護し、生前から死後まで、そして他の土地に引越しても一生守護する神様である。もう一つの神様は「宇迦之御魂命」穀物神」で、豊作を願い食を司る神である。私たちの生活、食べることを護ってくれる神様が揃っている。

過去 自然が息づく 月の山

次は、過去を意味する月山である。芭蕉は有名な「雲の峰いくつ崩れて月の山」と詠んでいる。八合目弥陀ヶ原を登っていきとお地藏様に出合う。地藏様は仏の位でいうと、如来（釈迦）の次の菩薩にあたるが、質素な姿をされているのは衆生を救いたいと願った初心を忘れないからであるとされている。山頂に住んでいるのが月読命で、ツクヨミはイザナギから生まれた神様である。ツクヨミは夜（月）の匡を治めるので、その神様が住んでいるので月山と呼ばれる。ツクヨミの働きは、月の満ち欠けを教え、種まきなどの農耕の作業時期を知らせるものだった。

未来 神秘的なお清めの 湯殿山

最後に3つ目の山、湯殿山に向かった。月山で死を迎えた私たちは過去と訣別してここから新たな生への歩みを始める。本来なら湯殿山への道は三山の中で一番厳しくハシゴや鎖に頼りながら登るのだが、今回は湯殿山参籠所に宿泊して朝出発した。ここでは帽子・靴を脱いで裸足で御神体に向かう。鉄分を含んだ湯が流れており滑りやすい岩肌を少々登っていくと、全国でも社殿がない珍しい御神体である。湯殿山で経験したことは人には語らないようにという戒律があるのでこれでお終いとする。



参拝後あし湯に入る

※1 庄内平野から眺めると牛が臥せている形に見えるので、出羽三山は「臥牛山」と呼ばれたので御縁年にあたり、12回お詣りしたのと同じ利益がある。

※2 藤沢修平著『周平独言』中公文庫（1984）